

特集 「食べる」を考える

企画 本誌編集委員会

特集の意図

「食べる」ことは三大欲求の1つであり、生命維持に不可欠な行為である。本特集では「食べる」を惹起させるメカニズム、「食べる」を実行するメカニズムについてレビューし、また、「食べる」の障害として、機能的な嚥下障害、精神的な摂食障害の捉え方と治療アプローチについて解説する。生物にとって「食べる」とは何だろうか。

特集の構成

1. 摂食行動および食欲の神経基盤 (桜井 武) 摂食行動の制御は、体重を一定に保つという動物にとって重要な性質を支える生体機能の1つである。この制御は脂肪細胞由来のレプチンが体脂肪量の情報を視床下部に伝達することで行われている。このメカニズムを中心に解説しつつ、摂食行動のもう1つの大きな要因として解明が望まれる、食欲を惹起する報酬系との関わりについても触れる。
2. 咀嚼の神経機構 (井上富雄) 咀嚼はエネルギー摂取の効率を上げる、哺乳類にとって不可欠のものだが、そのメカニズムにはまだ不明な点が多い。咀嚼の運動パターンがどのように生み出され、各運動ニューロンに送られるのか、下顎と舌の協調運動はどのように形成されるのかなど、これまでの知見を解説する。
3. 嚥下の神経機構 (井上 誠) 嚥下運動は、反射性にも随意性にも誘発可能で、複雑なメカニズムを有している。嚥下を咀嚼からの一連の流れとしてとらえ、嚥下運動が末梢性や中枢性の刺激からどのように誘発され形成されるのか解説する。
4. 嚥下障害のリハビリテーション (重松 孝, 他) 嚥下障害は、さまざまな原因により生じさまざまな病態で存在する。そのため、嚥下造影検査や嚥下内視鏡検査などを用いて正確に評価し、的確な治療法選択が求められる。リハビリテーションに必要な病態の知識、診断から治療の流れ、代表的な訓練手技について具体的に述べる。
5. 摂食障害 (三宅典恵, 他) 摂食障害は、やせ願望や肥満恐怖といった身体イメージの障害を主な背景とした精神疾患である。認知の歪みを認めることから、脳の機能異常が示唆されている。本項では、摂食障害を脳機能画像を用いた研究をもとに認知的側面から理解することを試みる。